



TITLE:

# モンゴル侵入後のルーム：兄弟間の スルタン位争いをめぐって

AUTHOR(S):

井谷, 鋼造

---

CITATION:

井谷, 鋼造. モンゴル侵入後のルーム：兄弟間のスルタン位争いをめぐって. 東洋史研究 1980, 39(2): 358-387

ISSUE DATE:

1980-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153779>

RIGHT:

## モンゴル侵入後のルーム

——兄弟間のスルタン位争いをめぐって——

井 谷 鋼 造

はじめに

I 一二四三—一二四九 1 モンゴル軍のルーム侵攻

2 サーヒブ・シャムスディーン

II 一二四九—一二五六 1 兄弟間のスルタン位争いの開始

2 スルタン位争いの再開とバイジュの第二次ルーム侵攻

III 一二五六—一二六一 1 兄弟による國土の二分

2 イッズッディーンの逃亡

むすび

はじめに

西暦十三世紀チンギス・ハンのホラズム・シャー朝遠征に始まったモンゴル人の西征は、ヨーロッパではシユレジア、ハンガリーに及び、西歐キリスト教世界を震撼させる一方、西アジアではイラン、イラク、シリア等のイスラーム世界中樞部を直撃し、エジプトと北アフリカ、イベリア半島部を除くイスラーム文明圏の殆んどがモンゴルの軍馬の踏む所となった。當時イスラーム世界の一端を形成し、西暦十一世紀以來セルジューク家のスルタンを君主に戴いてきた小アジア（ルーム）もまたモンゴル軍の侵攻を免れず、一二四三年バイジュ・ノヤン率いるモンゴル軍の侵攻を受け、以後モンゴ

ル人の征服と支配を受け入れねばならなかった。一二四三年以降十四世紀初頭の滅亡に到るルーム・セルジューク朝（ルーム・サルタナト）の歴史はモンゴル人による征服と支配の歴史に他ならなかった。モンゴル侵入後のルームについては古くはC・M・ドーソンが有名な「モンゴル帝國史」中で述べているのを初め、<sup>①</sup>アナトリア・トルコ史の立場からC・カーエン、O・トゥラン等が精力的に文献を渉獵してその成果を近年大冊として刊行した。<sup>②</sup>しかしながらモンゴル侵入後のルームの歴史についてはこれら先學による業績の蓄積によっても尙明らかなでない部分が少くない。とりわけモンゴル帝國自體の歴史と關連して小アジア（ルーム）におけるモンゴル人の支配がいつから、どのような形で始まったのかについては未だ明確な説明がなされていない。それは支配に先立つモンゴル人のルーム征服の過程が充分に檢證されていない爲である。本稿ではルーム・サルタナトの歴史に關する最も基本的な史料であるイブン・ビービーの記述を中心にモンゴル侵入後のルームの情勢を檢討し、特にモンゴル人によるルームの征服がいかなる過程を経て完成されたかを明らかにしたい。その際以下に記す様に一二四九年、一二五六年という二つの年次を境にモンゴル人のルーム侵入の年である一二四三年からスルタン 'Izz al-Dīn Kay-kāwūs 二世の國都コニヤ Qūniya からの逃亡の年である一二六一年までを三つの時期に分け、各期間に起つた出來事を具體的に述べてゆく事とする。

尙本稿で用いた史料とその略稱は次の通りである。

A. A.; Ibn Bibi, *Kitāb al-Awāmīr al-'Alā'iya fī al-Umūr al-'Alā'iya*, Tıpkıbasım, Önsöz ve fihristi hazırlayan A. S. Erzi, Ankara, 1956. (Aya Sofya Kip. Nr. 2985)

M. A.; Karīm al-Dīn Aqsarāyī, *Musammurat al-Akḥbār wa Musāḥarāt al-Akḥyār*, (ed.) O. Turan, Ankara, 1944. *Anonyme*; F. N. Uzluk, *Histoire des Seljoukides d'Asie Mineure par un anonyme*, Ankara, 1952.

T. J.; 'Alā' al-Dīn 'Alā Malik Juwaynī, *Ta'rikh-i Jahangushayī*, (ed.) Mirzā Muḥammad Qazwīnī, 3 vols. Leiden & London, 1912, 1916, 1937.

J. T.; Rashid al-Dīn Faḍl-Allāh, *Jamī' al-Tawārīkh*

(ed.) E. Quatremère, Paris, 1836.

(ed.) A. A. Armaade, Baky, 1957.

(ed.) A. A. Pomackeuy, A. A. Xeraypov, A. A. Armaade, Москва, 1968.

(ed.) B. Karimi, Tehrān, 1338.

(Ἰστωριῶν J. T./Q, J. T./A, J. T./P-X-A, J. T./K 2巻4冊)

*Sulak*; al-Maqrizī, *Kitāb al-Sulak li-Ma'rīfat Duwal al-Mulak* (ed.) M. M. Ziyāda, vol. I/3 parts, al-Qāhira, 1956, 1957, 1970.

*Chronography*; Bar Hebraeus, *The Chronography of Bar Hebraeus=Gregory Abūl-Faraj*, (trs.) E. A. W. Budge, London, 1932. (repr. Amsterdam, 1976)

# 一 一二四三—一二四九

## 1 モンゴル軍のルーム侵攻

西暦一二四三年六月二十六日(回曆六四一年 Muharram 月六日)小アジア東部の町スィヴァス Siwās とヘルズィンジャン Arzinjān の間にある Kōse Dağ (Kūsa Dağh) で行なわれたモンゴル軍とルームの سلطان Ghiyāth al-Dīn Kay-khusraw 二世との戦いはその後の小アジア(ルーム)の運命を決した大事件であった<sup>⑧</sup>。この戦いで七萬の兵を擁した سلطان はバイジュ・ノヤン Bāyju nūyan 率いる四萬のモンゴル軍の前に敢無く潰走し、ルーム・サルタナト(ルーム・セルジューク朝)の主要都市スィヴァスとカイセリ Qaysariya が相次いでモンゴル軍に征服される事態となった<sup>⑨</sup>。

しかしモンゴル軍は更に進軍してサルタナトの國都 (Dār al-Mulk) コニヤをめざす事なく、獲得した多くの戦利品を携えてムガーン Mughān の牧地へと歸路についた。ルーム側ではこれを機に宰相 (sāhib) の Muḥadhḥib al-Dīn がモンゴル人と講和すべく避難先のアマスィヤ Amasiya から當地のカーディー Fakhr al-Dīn を連れてバイジュの跡を追った。エルズルム Arzan al-Rūm の境域で彼らはバイジュに追いつき、ムガーンのチョルイゲン<sup>⑤</sup> Jurmaghūn の yūrt (牧地) まで同行した。ルームの宰相 (サーヒブ) は到来の理由を聞かれて、

戦いで斃れた (我方の) 兵士は三千人にすぎない事は汝らも承知していよう。モンゴル軍 (ashkar-i Mughul) も多數が斃れた。尙ルームの諸地方には十萬を數える軍隊が莫大な武器と馬匹を備えて待機している。……(中略)……ルームの國の組織はセルジュークのスルタン達以外には整えられず、諸地域の臣民達も彼らへの服従以外に魂を安める事は出来ない。この状況では他の帝王がこの地方を掌握する事は不可能であろう。(A. A. p. 533)

と答へ、ルーム・サルタナトはモンゴル軍との唯一度の戦鬪で壊滅したのではなく、またルームの支配においては今後ともセルジューク朝スルタンの存在が不可欠である事を強調した。この後サーヒブとモンゴル軍の長バイジュの間に講和が結ばれたが、講和の結果ルーム・サルタナトはモンゴル人に對してニとなり (即ち服従し) 毎年、衣服、金、家畜 (馬、牛、羊、ラクダ) から成る貢納を支拂う事になった<sup>⑥</sup>。こうしてルームはモンゴル人に對して服従する立場に置かれたのであるが、一二四三年のバイジュによる侵攻の直後から既にルームがモンゴル人の完全な征服下にあったとは言ひ難い。バイジュ・ノヤンのルーム侵攻はコーカサスに駐屯して邊境防衛の任務に當たるタマチ (探馬赤) 軍の長バイジュによる多分に恣意的に行なわれた遠征であつたと考えられるからである。イブン・ビービーの傳える所によれば、一二四三年キョセ・ダグの戦いに先立ち、一二四二年ルーム・サルタナト東端の要衝エルズルムを攻略せんとしたバイジュ・コルチは、バーザール (bāzār) や流通 (rawāj-kar) を盛んにし、妬や敵意を持つ者を貶めんが爲征服國家 (dawlat-i qāhira) に無數の新顔を得、その威光により永遠に自らの子孫達にモンゴルの大カンの僕に對する恩愛の助力が行き渡り、繼續す

る事を願つてゐた。(A. A. p. 514)

という。つまり後世の子孫の爲に新しい征服地を増しておきたかつたと言ふのである。加えて一二四三年當時モンゴル帝國ではウゲデイ汗没後未だに大カンが選ばれておらず、イラン總督アルグンの威令もアゼルバイジャン・コーカサスに駐屯していたバイジュ麾下のタマチ軍には及ばなかつた<sup>⑧</sup>。このような状況を考えるとバイジュのルーム侵攻が決して上からの命令で行なわれたものでなかつた事は明らかであらう。事實モンゴル側の同時代の史家ジュワイニーの手になる有名な「世界征服者の歴史」にはバイジュによるルーム侵攻の記事はない。ラシードの「集史」によれば、バイジュは「ルームはこの私が<sup>⑨</sup>にしたのだと自慢し、うぬぼれていた」という。バイジュの一二四三年のルーム侵攻に關する情報は決して多くはないが、當時の情勢を考慮すればこの侵攻がバイジュの獨斷による勳功を得、略奪を行なう爲の遠征であつたと推測出來よう。それ故、モンゴル軍はスルタンの潰走後もルームの國都コニヤの征服に進む事なくアゼルバイジャンの自らの牧地へ歸還したのである。

## 2 サーヒブ・シャムスッディーン

モンゴル軍の侵攻後暫くの閒ルーム・サルタナトの政治上最も重要な役割を果たしたのはシャムスッディーン・ムハンマド・イスファハーニー Shams al-Din Muhammad Isfahānī という人物である。この人物の活動の重要性はルーム・サルタナトの歴史を記録した根本史料であるイブン・ビービーにおいて一二四三年のモンゴル侵攻後六年間に亙る記事の大半が彼の事蹟に關連するものである事からも容易に理解されよう。以下イブン・ビービーの記述に従つてこの人物の活動の足跡を追つてゆきたい。

シャムスッディーン・ムハンマド・イスファハーニーはその nisba が示す如くイランのイスファハーン出身者らしいが詳しい経歴は不明である。イブン・ビービーによれば、この人物はスルタン 'Izz al-Din Kay-kāwūs 一世(在位一二二一

一〇二二〇) 時代「王室書記官」munshi-yi khāssであつた事が知られ、スルタン Ghiyāth al-Din Kay-khusraw 二世(在位一〇三七—一〇四五)の時代 nā'ib の地位 (niyabat)<sup>⑧</sup> を與えられたという。一二四三年のキョセ・ダグの戦が行なわれた當時シャムスディーンはシリアのアレッポ Halab へ傭兵 (ajri-khawar) を募るべくルームから派遣されていた。結局彼の活動はモンゴル人との戦に間に合わなかった。ルームのスルタン、ギヤースディーンの許へ歸還した後翌二二四四年シャムスディーンはその生涯において最も重要な任務に就いた。それは「キプチャクの野を鋭い劍によつて自らの家畜や軍馬の牧地となし、Rus や Bulghar や Bashqurd や Alān の諸王や長達の頭を自らに對する服従の軛へと引き入れた」Sayin Khān バトゥ大王<sup>⑨</sup>の許へ使節として赴く事であつた。シャムスディーンはバイジュの侵攻により「秩序の結び目が緩んだ」サルタナトを「力と正義と恩恵の建設者」であるバトゥ大王の手で復興させようとするルーム側の意圖の下に派遣された。アマスィヤのカーディー、ファフルディーン及び史家イブン・ビービーの父である Majd al-Din Muhammad Tarjīmān を従士 (nukar) とし一二四四年シャムスディーンは黒海 (darya-yi Khazar)<sup>⑩</sup> を渡り、幾多の砂漠を越えた後サイン・ハン＝バトゥの許へ到着した。シャムスディーンはバトゥの御前でスルタンの服従 (in wa bandagī) を申し述べ、多くの贈り物を獻じた。ルームの使節の辭去に當たりサイン・ハン＝バトゥはスルタンの爲に簾、劍、弓、上衣、帽子等の品を授與すると共に、

nā'ib (= シャムスディーン) を自らの側の (ルームの) 諸地方に於ける hākim となし、彼は Nizām al-Mulk, Salah al-'Alam と同じ lagab を與え、これを保證する yarligh (聖旨) を下賜した。(A. A. p. 542)

という。シャムスディーンの一行はバトゥ側の返使 Satuqūn (?) qurchi を伴ひ Shamakhī と Shirwān 即ちゼルバイジャンを経てルームへ歸還した。シャムスディーンは歸國後宰相 (sahib) Muhadhhib al-Din が死去して空席となつていたワズィール位 (wizarat) をスルタン・ギヤースディーンより授けられ、行政府の長となつた。翌年サーヒブ・シャムスディーンはキリキア遠征 (一二四五)<sup>⑪</sup> を指揮し、遠征中スルタン・ギヤースディーン・カイホスロウ

二世の訃報に接するとキリキアの Takawur<sup>㉔</sup>と講和を結んでブラカナ城 (Brakana) を割譲させて歸國した。イブン・ビー及びアクサライーによればスルタン・ギヤースッディーンは自らの後繼者としてその末子 'Alā' al-Dīn Kay-qubād 二世を指名し、皇太子 (wali 'ahd) に立てていたという<sup>㉕</sup>。しかしシャムスッディーンは當時のサルタナトの有力者達と協議した末、故スルタンの決定を覆し、彼の長子 'Izz al-Dīn Kay-kāwūs 二世をスルタンに即位させた。そしてスルタン・イッズッディーンが未だ若年であった爲シャムスッディーンはスルタンに代つて執政に當たり、runūd<sup>㉖</sup>を使つてライヴァルを次々に打倒し、ルーム・サルタナトにおいて殆んど獨裁的とも言える權力を掌握するに到った。イブン・ビービーはシャムスッディーンが「最高のサーヒブ」(sāhib-i a'zam) として、

スルタン・ギヤースッディーンの信頼により國の hākīm となり、スルタン・イッズッディーンの諸事の保護者 (kāfil) であり、今や宗教と國家の手綱は悉く彼の掌中に入り、國の主人であるスルタンすら彼の手中にある。(A. A. p. 563) と述べている。サーヒブ・シャムスッディーンがルーム・サルタナトにおいて絶大な權力を掌握出來た背景には上に引用したイブン・ビービーの記事が述べている様に、第一に彼がバトゥ側ハークム (太守) になつてゐた事、第二に彼がスルタン・イッズッディーンの擁立に功有り、しかもスルタンは幼少で統治能力が無かつた事を指摘出来る。そして彼の時代は「雨滴の代りに公正の雲より金貨、銀貨 (dīram u dīnār) が降り注いだ」とイブン・ビービーが稱える如く安定した時代であつた。對モンゴル關係ではサーヒブ・シャムスッディーンはスルタンの弟 malik Rukn al-Dīn Qūlīch Arslan をモンゴリアへ派遣し、更に彼自身モンゴルのイラン總督アルグンの下で sāhib-i diwān となり、史家ジュワイニーの父でもある Bahā' al-Dīn と密接な關係を保つてゐた<sup>㉗</sup>。しかしシャムスッディーンがルームにおける獨裁的な權力を掌握して二年後、一二四九年に彼の權威は急激に没落し、彼自身の身に破滅が訪れる事となつた。シャムスッディーンの没落と滅亡の原因となつたのはモンゴルの大カン・グユクの即位に列席したスルタン・イッズッディーンの弟ルクスッディーン・クルチ・アルスランの歸國であつた。ジュワイニー、ラシード等のモンゴル側の史料やパール・ヘブラエウスに記され



る様に一二四六年八月のグユクの即位にはルームからスルタンの弟ルクヌッディーンが参列した。<sup>④</sup> ジュワイニーによれば即位後大カン・グユクは「その御前に來たが故にルームのスルタン位をルクヌッディーンに定め、彼の兄を遠ざけた」という。<sup>⑤</sup> バール・ヘブラエウスの伝える所によるとルクヌッディーンに同行した中に *Bahā ad-Dīn Tarjān* という者があり、この人物がグユクに對し「彼（＝サーヒブ・シャムスッディーン）は貴顯を殺害し、故スルタン（＝カイホスロウ二世）の妻を娶り、汝の命令なく新スルタンを立てた」とサーヒブ・シャムスッディーンの横暴を誇った爲グユクはスルタン・イッズッディーンの廢位とサーヒブの排除を命じたという。<sup>⑥</sup> バール・ヘブラエウスが傳えるうちサーヒブがギヤースッディーンの未亡人を娶ったという記述はルーム・サルタナトの史料中には見えない。一方バハーウッディーンなる人物はルームからマリク・ルクヌッディーンをモンゴルの大カンの許へ送った際の記事中に現れる *Bahā al-Dīn Yūsuf bin Nūḡ Arzinjāni Tarjān* の事であろう。<sup>⑦</sup> 諸史料の記述を綜合すると、サーヒブ・シャムスッディーンの没落と滅亡は彼がその獨裁的な權力の掌握過程で多數のライヴァルを打倒した事がサルタナトに仕える人々の反感を買い、バハーウッディーンがこれらの人々を代表してサーヒブの專横を直接大カンに訴えた結果であつた。今一つサーヒブ・シャムスッディーンの没落については次の様な原因が考えられる。それは上述の如く彼がバトゥ側のルームに於けるハーキムとなつていた事である。この事は當時のモンゴル帝國內部の情勢において重大な意味を有した。即ちグユクの即位に際してジュチ・ウルスのバトゥは當時チンギス・ハンの子孫中最も有力なる人物であるに拘らず自ら列席しなかつた事が示すようにバトゥとグユクの間には一二三九年ヨーロッパ遠征途上の仲違い以來深刻な不和が生じていた。此の様な情勢の下でグユクがバトゥ側のハーキムであるサーヒブ・シャムスッディーンと彼によつて擁立されたスルタン・イッズッディーンを自らに服従を表明するルームの支配者として承認しなかつたとしても不思議は無い。つまりサーヒブの没落と滅亡はルームの國內事情のみならず、ルームを服従させたモンゴル帝國內部の政治状況を反映して結果したものと考えられる。サーヒブ・シャムスッディーンはルクヌッディーン一行の歸國を知ると使者と財貨をエルジギデイ *Iljigay* <sup>⑧</sup> の許へ送つたが、時既

に遅くルクヌッディーン一行の使臣 (īcht) がサーヒブを捕え、殺害せよとの大カンの聖旨を携えてスルタン・イッズッディーンの許へ達した。サーヒブは策を盡して難を免れんとし、サイン・ハンの tashrif (賜衣) を着て自宅に籠ったが、度々の出頭命令に抗し切れず、スルタンの宮殿に赴いて監禁された。その後サーヒブは拷問を受けて全財産のありかを白状させられた後 atābeg Jalāl al-Dīn Qarāīy の許へ送られ斬首された。(A. D. 一二四九・三・二四)<sup>④</sup>

以上二節に分けてモンゴル侵入後のルームの状況を一二四三—一二四九の期間について考察したが、結論として以下の事を述べておきたい。即ち一二四三年のバイジュの侵攻から一二四九年のサーヒブ・シャムスッディーンの死に到る期間ルームにはモンゴル人による直接的な支配が無かった事は明らかである。にも拘らず、モンゴル人に對して「二」となった「ルーム・サルタナトはモンゴル人の支配體制に組み込まれる事を免れなかった。サルタナトで獨裁的な權力を掌握したサーヒブ・シャムスッディーンが急速に没落した事實はそれを明示している。またこの期間のルーム・モンゴル關係で最も注意を拂う必要があるのはキプチャク草原のバトゥとルームのサーヒブ・シャムスッディーンの關係である。このサーヒブ・シャムスッディーンの死によりバトゥ側のハーキムがルームの執政を行なう時代は終った。

## Ⅱ 一二四九—一二五六

### 1 兄弟間のスルタン位争いの開始

マリク・ルクヌッディーンの歸國はサーヒブ・シャムスッディーンの没落と共にもう一つの厄介な問題をルーム・サルタナトにもたらした。前述の如く大カン・グユクの裁定によつてスルタン・イッズッディーンは斥けられ、代つてルクヌッディーンがスルタン位に即く事が定められていた爲である。イブン・ビービーによればサーヒブ・シャムスッディーン的首級がスイヴァスに居たルクヌッディーンの許へ届くとルクヌッディーン側はカーディー Jamāl al-Dīn Khotanī を

ニヤのイッズッディーンの許へ遣わし、

大カンにより(ルーム)諸國の سلطان 位は私に與えられ、至高の yarligh がこれを保證している。(大カンは)刃向かう者共を罰せんが爲二千のモンゴル騎兵<sup>⑤</sup>を我々に同伴させた。命に服し、ルクヌッディーンを سلطان と認めるのならば(我々を)出迎えよ。(A. A. p. 588)

と告げさせた。イッズッディーン側は國の柱たる者たちを集めて協議した末ルクン側のカーディーに對し、

弟が兄に先んじて權威の優越を示す事はイスラーム法 (shari'at) にも murū'at<sup>⑥</sup> にも人間道徳にもかねてからの慣習にも沿うものではない。……(中略)……必要な事は三人の兄弟が揃つて王座に即ぎ、貨幣と khutba が全員の名と laqab で打たれ、讀まれる事である。(A. A. p. 589)

と答えた。この間の事情はモンゴルの大カンの聖旨(yarligh)を據り所に سلطان 位を要求する弟ルクン側に對して兄イッズ側は窮餘の策として兄弟の王權を名目上共存させる爲末弟のアラーウッディーンを加えたギヤースッディーンの遺児三人によるサルタナトの共同統治を逆に提案したものと解せられよう。しかし乍らルクン側はこの提案に應じず、モンゴル軍は歸還させたもののワズィール位等の官職を自らの側のアミール達に與え、あくまでも سلطان 位を要求する構えを示してスィヴァスからカイセリへと西進した。ルクヌッディーンの一行がアクサライ Aqsarā' に到着するとイッズッディーン側も何らかの對應を餘儀なくされた。 سلطان はサーヒブ・シャムスッディーン亡き後イッズ側で最も有力なアミール atābeg Jalāl al-Dīn Qarā'iy<sup>⑦</sup> と相談の後ルクン側を迎え撃つ事に決した。イッズッディーンはコニヤを出て Rūzbihān の野で兵を集め、一萬の軍勢を率いて سلطان・ハン(kārwānsarā-yi Sulṭān 'Alā' al-Dīn)<sup>⑧</sup> へ向かった。ルクヌッディーン側もイッズッディーン出撃の報を知ると直ちにアクサライを出て سلطان・ハンに到った。一二四九年六月十四日兩軍は騎乘して戦列を整え、 سلطان 位をめぐつてイッズ・ルクン兄弟の間に戦端が開かれた。結果はルクヌッディーンの敗北となった。ルクヌッディーンは敗戦の後公道脇の丘に登っていた所をイッズッディーンの「厩舎頭」 amir-i akhur

Fakhr al-Din Arslanoghmushに發見され、彼に手綱を取られてイッズッディーンの許へ連行された。兄弟が會見すると兄は弟を抱擁して嘆き悲しみ、弟の過を許し、反抗を責めなかったという<sup>⑤</sup>。以上の経過はイブン・ビービーの記述によるが、他にもパール・ヘブラエウスと著者不明のセルジューク朝史がイッズ・ルクン兄弟のスルタン位争いの経過を記しており<sup>⑥</sup>、ドーソンは専らパール・ヘブラエウスによつてこの経過を述べている。それによると兄弟間に會戦はなく、一方的にルクヌッディーンが捕えられた事になっている。しかしイブン・ビービーによる上述の様な詳細な経過報告が残されている以上スルタン位をめぐる兄弟が戦場に相見えたと考えるのが妥當であらう。著者不明のセルジューク朝史もスルタン・ハンに於ける兄弟の會戦を記している。

一二四九年に於けるルクヌッディーンの歸國、サーヒブ・シャムスッディーンの死に續いてルーム・サルタナトではイッズ・ルクン兄弟の間でスルタン位をめぐる争いが始まった。この三つの事件は一連の出來事であり、以後兄弟は再び干戈を交え、一二六一年に到るまでスルタン位争いを繰り返すが、その發端が先に述べた大カン・グユクの裁定にあつた事は言うまでもない。

兄弟間のスルタン位争いがイッズッディーンの勝利に終つた後ルーム・サルタナトにおいては三人の兄弟、イッズッディーン・カイカーウス、ルクヌッディーン・クルチ・アルスラン、アラウッディーン・カイクバード、による名目上共同の統治が始まった。イッズッディーンが自らに對して敗北した弟ルクヌッディーンのみならず、末弟アラウッディーンをも含めて共同統治の體裁を整えたのはスルタン位争いに關連して新たにモンゴル側に介入の口實を與えず、實質的な現狀維持を續ける爲であつたと考えられる。そしてルームに於ける實際の執政はイッズッディーンを強力に支援したアタベグ・カラタイを中心としたアミール達の手で行なわれた。しかしルームのアミール達のうちにも嘗てのサーヒブ・シャムスッディーンの如くモンゴル人の權威の下で國政を推進せんとする者達とこれに對抗してあくまでもサルタナトの獨立と傳統を維持せんとする者達の間に對立が生じた。イブン・ビービーによれば事の起りはサイン・ハンⅡパトゥがサーヒブ・シ

ヤムスッディーンの殺害に抗議し、彼の財産を接收する爲三人の使臣<sup>⑤</sup>をルームへ派遣した事であつた。ルーム・サルタナトではこの件に關して「筆頭書記官」*malik al-kutāb* Shams al-Din Maḥmūd Tughrā'i を派遣して釋明させる事を決め、トゥグララーイーは故サーヒブの四人の部下を伴ない、サーヒブを死へ追いやつたバハーウッディーンと Sarim al-Din なる二人の人物を「ざらし臺」(*du shakh*) に架けてバトゥのオルド(軍營)へ連行したという。トゥグララーイー達はバトゥの許で實情を報告し、「大いに苦勞してその恐ろしい窮狀より脱した」後、バトゥはトゥグララーイーにワズィール位を與えたのを初め、故サーヒブの四人の部下にそれぞれ *nāib*, *mustawfi*, *amir-i 'arīq*<sup>⑥</sup> 等のルーム・サルタナトの要職を與え、ヤルリグ(聖旨)を發してこれを保證した。しかしトゥグララーイーの一行がルームへ戻ると彼らがバトゥの許でスルタンの許可なく官職を與えられた事に反撥して「ルームの諸地方においてはスルタンの命令以外聞いた事が無かつた」アミール達がトゥグララーイー達と争ひ始めた。カラタイ、アルスランドグムシュ、Nizām al-Din Khurshid 等の有力なアミール達の殆んどが擧つてトゥグララーイー側に反撥した爲孤立し、苦境に陥つたトゥグララーイーはバイジュ・ノヤンに援助を求める密書を送つた。しかしこの密書はカラタイ側の手に落ち、トゥグララーイーは査問を受け、「セルジューク王朝への忠誠に反した」としてアンタリヤ *Analiya* で投獄された。こうした中でトゥグララーイーの部下の一人が密かにルームを脱出してアッラーン *Arrān* のバイジュの許へ達し、彼にトゥグララーイーの事情を知らせた。バイジュは直ちに二人の使臣を送つてアンタリヤの獄からトゥグララーイーを救出させ、トゥグララーイーは使臣に同行してバイジュの許へ向かつたという。以上に記した克明な事件の推移はイブン・ビービーの記述によるが、これらの事情はルームにおけるバトゥの權益要求の根強さを示すと共にルーム・サルタナトの内部にはこれを利用せんとした故サーヒブ系のトゥグララーイーを初めとするアミール達と彼らに反撥し、サルタナトの獨立を維持せんとしたカラタイを初めとするアミール達の二つの勢力が存在した事を物語っている。そしてトゥグララーイーが投獄された一二五〇年の段階では後者が優勢であつたと言えよう。しかしこうしたアミール達の姿勢とは別にモンゴル人との關係では一二四三年にバイジュと結んだ講和條

約により定められた貢納の支拂いがルーム・サルタナトにとって漸く重荷となりつつあった。イブン・ビービーはサーヒブ Muhadhib al-Din の取決めに よつてそれまで毎年四萬 'adad の手當 (mawjib) がルームのアミール達に支給されていたのをその半額がモンゴル人の爲の出費に回される様になった事を記している。サーヒブ・シャムスディーンの死後サルタナトのワズィール位を與えられたカーディー Najm al-Din Nakhchiwani は「毎日の自らの俸給 (jamagi) を國庫 (bayt al-mal) より一日二 diram 一年に七二〇 'adad 以下とし、國家の他の要人達もこれに準じて俸給を受ける事」を定めてアミール達の不評をかったという。このサーヒブがバトックの使臣の到來に處罰を怖れてアレップへ逃亡した後ワズィール位はカーディー 'Izz al-Din Muhammad Rāzi という人物によつて占められた。彼の時代には、

バイジュ・ノヤンや他のノヤン達の使臣が頻繁にルームに到着し、(サルタナトは) 毎年モンゴル軍のアミールや婦人達 (khawātin) の求めに應じて數え切れない財貨を支出せねばならなかった。いかなる方法によつてもこの要求を拒む事は出來ず、資金は少く出費の多い狀況に到つた。(A. A. p. 616)

という。この爲サーヒブは當時の「國家の四柱」であつたアタベグ・カラタイ、Shams al-Din Yawtāsh beglerbegi、フアフルディーン・アルスランドグムシュと協議して一二五一年大カンに即位したモンケの許へ使者を派遣して實情を報告し、バイジュの壓制を大カンの命令により除去する事が最良の策であるとの結論に達した。使者には Fakhr al-Din 'Alī が選ばれ、彼には數々の贈物の他特別に十萬 diram の現金を託してモンゴリアへ向かわせた。イブン・ビービーによれば、大カン・モンケはルーム側の要求を聞き入れてバイジュや他のアミール達の使臣の往來を禁じ、ルームにおける戸口調査 (sar-shumārā) も禁止したという。そして大カンは Toghtasūn yarghuchī なる「斷事官」に従士を附けて「全ての皇子達の側から」ルームへ派遣した。斷事官に同行してルームへの歸途バイジュの許へ立ち寄つたフアフルディーンはバイジュに大カンの命令を傳えた。バイジュはこれに對し「今や私をルームの諸地方から閉め出したからには汝らに災いが降りかかろう」と語つたという。モンゴルの斷事官 (yarghuchī) はルームへ着くと熱烈に歓迎され、以後國は平穩となり、

「カリフの館」Dar al-Khilafa＝バグダード、シリア、モスル、マルディン、フランク諸國からの使節がルームへ往來したという。<sup>⑧</sup>以上の如くイブン・ビービーはファフルッディーン派遣の経緯を詳細に記述しているが、筆者はこれに對應するモンゴル側の史料を知らぬので果して事態がイブン・ビービーの記す通りに推移したか否かについて確答は出せない。にも拘らず上述の事情はモンゴル人による經濟的な壓迫がルームにとって如何に重いものであったかを雄辯に物語っている。そしてこの現實はルームのアミール達が如何にモンゴル人に對しサルタナトの獨立を維持せんとする姿勢を保とうが、決してモンゴル人の課した經濟的な負擔からは逃れる事が出来なかつた事を示しているのである。

## 2 スルタン位争いの再開とバイジュの第二次ルーム侵攻

一二五四年ルーム・サルタナトに二つの重要な事件が起つた。一つはスルタン・アラウッディーンのパトゥ・モンケの許への派遣であり、他の一つはイッズ・ルクン兄弟間のスルタン位争いの再發であつた。二つの事件共イブン・ビービー、アクサライー、バール・ヘブラエウス等が記しており、<sup>⑨</sup>斷片的な記述はルブルクの旅行記中にも見える。<sup>⑩</sup>このうち最も詳細に事件の経過を記すのはイブン・ビービーであり、以下その記述に基づいて兩事件の概要を述べておきたい。

一二五四年サイン・ハンⅡパトゥの許よりスルタン・イッズッディーンの出頭を求める使臣が相次いで到着した。これに對しカラタイを初めとするルームのアミール達は「ルームのスルタンが他者の命令に服する」事など思つてもいなく、たので適當な言い譯をして一旦は使臣を返した。パトゥは、しかしこの言い譯を認めず、再三再四使者を送つてスルタンが自らの許へ出頭する様命令した。この爲ルーム側ではアミール達が協議の末三人の兄弟スルタンが揃つて出發する事を決め、三兄弟はコニヤを出發した。ところがカイセリでイッズッディーンを支持する最も強力なアミールであつたアタベグのカラタイが病没した爲イッズッディーンは出發を諦め、末弟のアラーウッディーンを自らの代理として派遣する事とした。アラーウッディーンは兄の代理としてパトゥ及びモンケの許へ赴き「出費の多く、資金の少い事情」を上奏する豫

定であつたが、バトウの許よりカラコルムの大カン、モンケの御前へ赴く途上で原因不明の死を遂げた。イブン・ビービーの記述によればアラウッディーンの一行にはルームでの勢力争いに敗れたトゥグライーが途中から加わり、彼はアラウッディーンの死後も旅を續けてモンケの御前に到り、大カンより聖旨と牌子 (pāyza) を授けられたという。<sup>⑧</sup> 一方ルームに残ったイッズ・ルクン兄弟のうちルクヌッディーンは兄イッズディーンのギリシャ人・キリスト教徒の叔父達 (akhwāl-i Rūmī kish) と對立した結果、曾てグユク・ハンの即位への列席に同行した Kamāl al-Dīn なる人物の勧めで粗服 (khulqān) を身に纏い、顔を見られぬ様、鉢 (khwāncha) を被つてコニヤからデヴェリ Dawalū へ脱出した。ルクヌッディーンはカイセリで軍司令官 (subshī) の Şamsām al-Dīn Qaymāz に迎えられ、この町で即位した後各地から兵を集め、コニヤのイッズディーンに對抗した。イッズディーンは弟の反亂を知ると使者を送つてルクヌッディーンを宥めたが、その際は弟にスィヴァス、マラトヤ Malatya、アーミッド Amid (現在の Diyar Bakr)、ハルプト Khartabirt を割譲する事を提案した。ルクヌッディーンはこれに對し更にカイセリとクルシェヒル Qırshahr を要求した。即ちルクヌッディーンは此度はサルタナト全域の支配者たる唯一のスルタン位を兄イッズディーンから奪う事を企てたのではなく、兄の存在を認めた上でサルタナト領土の東部領域の支配權を求めたのである。ここに到つてイッズ・ルクン兄弟は共に再び出陣し、Tüz Aghāj 地方の Ahmad-hisār の野<sup>⑨</sup>で對峙して會戦に及んだ。戰鬪は前回同様ルクヌッディーンの敗北に終り、ルクヌッディーンはデヴェリからキリキアのシス Sis (現在の Kozan) に逃亡せんとした所を途中トルコマンに發見され、カイセリへ連れ戻された。二つの事件は以上の様な經過を辿るが、兩事件にはルームをめぐる情勢の變化が反映していると考えられる。情勢の變化とは一二五一年の大カン・モンケの即位とモンゴル帝國内部におけるモンケ・バトウ體制の成立に起因するものであり、その結果曾てグユクの命令でスルターン位を廢されたイッズディーンがルームのスルタンとしてバトウの許への出頭を命ぜられるのに對し、ルクヌッディーンはグユクの没後モンケ・バトウ體制の成立によってそのスルタン位要求の據り所を失つてしまふのである。この様な背景を考慮する時一二五



四年のイZZ・ルクン兄弟の سلطان 位争いの直接の原因は五年前のそれと異なり、ルームの純國內的な事情に求められねばならない。具體的には兄イZZ ッディーンに不満を持つアミール達が弟ルクヌッディーン側に結集し、兩者間に深刻な對立が生じた結果アフマド・ヒサールの戰鬪に到ったと考えられる。イブン・ビービーはルクヌッディーン側の最も有力なアミール、カイマズがニグデ Nakida の軍司令官職 (sar-tashkari) を解任された事で سلطان・イZZ ッディーンに恨を抱いていた事、イZZ ッディーンの母がギリシヤ人であつた爲彼のキリスト教徒の叔父達が國事に容喙し、とりわけルクヌッディーンと鋭く對立した結果ルクヌッディーンは「囚人の如く惨めな」心境<sup>④</sup>にあつた事、更にはイZZ ッディーンが「卑しい、下品な」*gūlan*<sup>⑤</sup>達を側近に取り立て、高位を與えていた事が「國のアミール達」に反感を以て迎へられた事をそれぞれ記している。 سلطان・イZZ ッディーンは自らが「半ギリシヤ人」であつた爲かイスラーム教徒よりキリスト教徒を好遇し、トルコ人よりギリシヤ人を尊重する傾向があつた様でサルタナトのアミール達はこうしたイZZ ッディーンの「諸 سلطان の慣習に沿わない」やり方を容認しなかつたと言われる<sup>⑥</sup>。そしてイZZ ッディーンに對する反撥は兄弟間の反目を通じてルクヌッディーン側に勢力として結集し、

人々は完全に彼 (＝ルクヌッディーン) の側に靡き、名だたるアミール達、勇敢な軍の指揮者達が彼の軍の側に附いた。(A. A. p. 613)

という狀況を現出させたと言えるであらう。しかし結局ルクヌッディーンは此度も兄の王權を覆す事に失敗し、當初アマシヤ、後には Burughlū<sup>⑦</sup>に幽閉される身となつた。

一二五四年再び弟ルクヌッディーンの挑戦を斥けたイZZ ッディーンはルームに於ける唯一の سلطان に復するが、彼の地位も二年後重大な危機を迎えた。一二五六年夏突如バイジュ・ノヤン率いるモンゴル軍が「家畜や女、子供を伴つて」再びルームへ侵入したのである。ルーム側は初めバイジュ侵入の意圖を圖りかねて Nizām al-Dīn Khurshid という人物を派遣してバイジュの意圖を探らせた。一方エルビスタン Abulustān 方面でトルコ人の Aghach-eri (Aghājariyān)<sup>⑧</sup>

討伐を行なっていたサーヒブ・イッズッディーンの軍隊がコニヤへ歸還し、又各地から兵員が召集されてルーム側は戰鬪準備も怠らなかつた。ホルシードはコニヤへ歸還後バイジュの意圖がルームに夏營地 (yaylāq) 冬營地 (qishlāq) を獲得する事にある事を知らせ、スルタンに一旦はこれを了承させた。しかしスルタンは密に側近の ghulam 達と謀つてモンゴル軍に對する反抗を計畫し、サーヒブ・イッズッディーン、軍總司令官 *malik al-umara'* Shams al-Din Yawtish beglerbeg の率ゐる軍隊を派遣してアクサライ近郊のスルタン・ハンでバイジュ麾下のモンゴル軍に挑んだ。戰鬪は回曆六五四年 Ramadan 月二十三日 (=A. D. 一二五六・一〇・十四) に行なわれ、ルーム軍はバイジュ配下の Khwāja nuḡan<sup>⑤</sup> の爲に大敗を喫し、サーヒブ・イッズッディーンは戰死、スルタン・イッズッディーンは敗戦の知らせを聞き、コニヤを捨ててアンタリヤへ更には Iādīq (ラオディカエアー現在の Denizli) へ逃亡するという結果となつた。以上の經過はイブン・ビービーの他アクサラーイー、著者不明のセルジューク朝史、バール・ヘブラエウスに語られており、バイジュが牧地を求めてルームに侵入し、スルタン・ハンの戰でサルタナト軍を打ち破つた事は諸史料の記述が一致している。それでは何故にバイジュはルームに牧地を求めて侵入したのか。その理由はモンゴル側の史料が明確にこれを物語っている。即ち大カン・モンケが弟フラグに西アジア遠征を命じ、フラグをイランへ派遣する際「バイジュとチヨルマグンの軍隊はルームへ行く事」がモンケの命令として出されていた<sup>⑥</sup>。ラシードは一二五六年十一月二十日イスマリーリー派の首領 Rukn al-Din Khurshah を降服させた後フラグがイランのカズウィーン附近で越冬した事を述べているが、バイジュはこれに先立ってムーガーンの牧地を明け渡し、ルームへ侵入したのであらう。一二五六年のバイジュのルーム侵攻はこれが大カン・モンケの命令に基づくものであつた事、短期の遠征ではなく家畜・家族を伴つた牧地の移動であつた事という二つの點で一二四三年の侵攻と全く性格を異にするものであつた。一二四三年のキョセ・ダグの戰を中心とした侵攻がバイジュの獨斷による短期的な遠征の性格をもつていたのに對し、一二五六年の再侵攻とスルタン・ハンの戰はモンゴル帝國內部に於ける計畫的、組織的な牧地移動命令に起因したものであつた。モンゴル側に關して言えば一二五六年

のルーム侵攻は一二四三年のそれに比してはるかに統制のとれた、組織化された状況の下で行なわれたものであるという點でモンゴル人による本格的なルームの征服と支配の端緒となったと言えよう。一方自らの領土にモンゴル人の牧地が設定された事に起因するバイジュの第二次侵攻はルーム・サルタナトにとって以後直接的な内政への介入を許したという點で致命的な事件であった。

一二四九年のサーヒブ・シャムスッディーンの没落から一二五六年のバイジュの第二次ルーム侵攻に到る期間の諸事件を通じて言えるのは、二度に亙る兄弟間のスルタン位争いがあったもののイッズッディーンの王權は安泰であった事、バトゥのルームにおける權益要求は根強かったが、かつてのサーヒブ・シャムスッディーンの如きバトゥ側のハーキムが國政を掌握する事は無かった事、ルームのアミール達はモンゴル人に對し經濟的な壓迫を受けながらもサルタナトの獨立を維持せんとする姿勢を保っていた事等であらう。しかしバイジュの第二次ルーム侵攻とスルタン・イッズッディーンの逃亡という事態が発生した事によりこの様な情勢は一變した。

### Ⅲ 一二五六—一二六一

#### 1 兄弟による國土の二分

一二五六年のバイジュの第二次ルーム侵攻とスルタン・イッズッディーンの國都コニヤからの逃亡の結果サルタナトの要人達は *Burgulu* の獄からルクヌッディーンを救出してコニヤでスルタン位に即けた。一二五六—七年の冬をスルタン・ルクヌッディーンはバイジュと共に *Ab-i-garm* の *Qizil Wayran* の地ですごした。一方イッズッディーンはコニヤからアンタリヤ、更にデニズリ (*Ladig*) へと逃げた後バイジュの子 *Bisutay* によるバイジュの許への出頭の勧告にも應ぜず、デニズリからビザンツ領 (*bi-lad-i Lashkari*) へと避難した。一二五七年の春バイジュはフラグに拜謁すべくルームを去

ったが、彼は出發に當つてルクヌッディーンに對し國都コニヤの城壁の破壊を命じ、ルクヌッディーンは町の外壁を破壊せざるを得なかつた。ビザンツ領にあつたイッズッディーンはバイジュの歸還を知ると故國へ歸らんとし、ルクヌッディーンがバイジュの跡を追う様にフラグの拜謁へと出發した爲抵抗を受ける事なくコニヤへ歸還した。アクサライーによればビザンツ皇帝 (malik al-Rūm) は彼の掩護に三千のフランク騎兵を同行させたという。ルクヌッディーンはハマダーンでフラグの御前に達し、拜謁して慰撫された後全軍、全地域、全人民を統べるスルタンとしてフラグより忠告 (nashīh) を與えられた。ルクヌッディーンは歸國を許され、エルズインジャンに到つたが、嚴冬の爲此地に滞留を餘儀なくされた。イブン・ビービーは語っていないが、ルクヌッディーンのエルズインジャン滞留の原因にイッズッディーン側の抵抗があつた事は確實である。翌春 (一二五八) ルクヌッディーンの最も強力な支持者であつた parwāna Mu'in al-Dīn Sulaymān が自らの領土トカト Tūqat の奪回を圖り、却つて Yuldūz の山中でイッズッディーン側の Shah-malik なる人物に敗北を蒙つた事態に及び、パルワネはフラグのオルドへ赴いて援助を請うた。フラグは Alijāq, Qadaghān の二將を一萬の兵と共に派遣し、この援助を得てルクヌッディーンはニクサル Nakisar を攻略し、此地で三度目の即位を行なつた。しかしモンゴル軍の援助を受け乍らルクヌッディーンはトカトの攻略に失敗し、その近傍に滞留せざるを得なかつた。イブン・ビービーによればこの様な状況のルクヌッディーンの許へスルタン・アラウッディーンに同行し、モンゴリアへ赴いたトゥグララーイーが到着したという。トゥグララーイーは大カン・モンケの許でスルタン・イッズッディーンの反亂 (‘isyan) とスルタン・ハンの戦の知らせを受け、これを知つたモンケ・ハンがルームのスルタン位をルクヌッディーンに授けた事を傳えた。モンケの命令に基づいてトゥグララーイーとルクヌッディーンはイッズッディーンに對しその出頭を求めて度々使者を送つたが、イッズッディーンは出頭に應じなかつた。結局スィヴァス河 (āb-i Siwās- 即ち Kızıl Irmak) を境に國土の西半をイッズッディーンが支配し、東半はルクヌッディーンの統治下に入る事になった。史家イブン・ビービーは自らこの兄弟間で國土を二分する盟約の締結に立ち合つたらしく、

卑しや僕 (banda-yi kamina 即ち私) がこの盟約を書き留めた。(A. A. p. 631)

と記している。イッズ・ルクン兄弟間の國土の二分はイッズブディーン側の大幅な讓歩によって實現したと考えられる。そしてこの大幅な讓歩を迫ったのはルクヌディーン側に直接的なモンゴル人の軍事的支援—イブン・ビービーによれば一萬のモンゴル軍—があつた爲であらう。ルクヌディーンは最早一二四六年のグユクの裁定ではなく、西アジアに自ら到來したモンゴルの皇弟フラグ、そしてこのフラグを派遣した大カン・モンケの承認により兄イッズブディーンに對しルームのスルタン位を要求出來たのである。しかし一方ルームの現状は決してルクヌディーンに對して有利な狀況になかつた。それはルクヌディーンが曾て二度のスルタン位争いにおいて一度も兄イッズブディーンに對して有利な狀況になかつた事のみならず、フラグの許より歸還後獨力ではエルズインジャンより先へ進めなかつた事により明らかであらう。結局トゥグララーイーの發意によると思われる兄弟間の國土分割はモンゴル側の支援を據り所にスルタン位を要求するルクヌディーンと自ら進んでモンゴル人の許へ赴こうとはせぬイッズブディーンの間妥協を見出し、ルームの現状に沿つた解決を探つた結果であつたと考えられる。一二五六年以降モンゴル人によるルームに對する干涉は以前にも増して直接の許へ赴いて積極的な服従したが、一方兄のイッズブディーンは一二五四年のバトゥによる出頭命令にも一二五六年のバイジュによる命令にも、更には一二五八年のトゥグララーイーを通したモンケの出頭命令にも應ぜず、決してモンゴル人の許へ赴く事は無かつた。モンゴル人にとって一向に服従を表明しに來ないイッズブディーンは彼らに背いているのであり、取り除かねばならない存在であつたのに對し、積極的に服従し、彼らに協力するルクヌディーンこそ支持すべき「正當なる」スルタンであつた。逆にルームにとって見ればイッズブディーンはルクヌディーンよりはるかに國家の主權の獨立を維持せんとする姿勢を貫いたスルタンであり、モンゴル人に對する服従を潔しとせぬアミール達の據り所であつた。しかしこのサルタナト獨立の據り所となつていたイッズブディーンは王權も一二五六年のバイジュの第二次ルーム

侵攻とこれに續くルクヌッディーンの即位、更にモンゴル軍の直接的な介入が原因となって決定された國土の二分により存亡の危地に立たされた。ルーム・サルタナトの服すべきモンゴルの支配者は最早バイジュ・ノヤンではなく、黒海の彼方キプチャク草原のバトゥ大王でもなく、ルームから僅かにコーカサスを隔てたアゼルバイジャンに牧地を定めたフラグ・ハンとなったのである。

## 2 イズッディーンの逃亡

イズ・ルクン兄弟の間に國土を二分する事を決した盟約が結ばれると二人は相次いで一二五八年二月十日バグダードのアッバース朝カリフ al-Musta'sim bi-Allah を降服させたフラグの許へ赴いた。ラシードによれば六五六年 Sha'ban 月四日 (=A. D. 一二五八・八・六) ルームの سلطان・イズッディーンが、續いて四日後ルクヌッディーンがタブリーズ地方の Mûniq でフラグの御前に達したという。ラシードによると、

フラグ・ハンはスルタン・イズッディーンに關して(彼が)バイジュ・ノヤンに對して無禮をなし、彼と戦つた爲に怒つていた。バグダードの攻略後スルタン・イズッディーンは甚しく畏怖して計略の妙をもつて自らが罪ある困難な立場から救われん事を願つた。(J. T./Q. p. 322, J. T./A. p. 66)

その故にイズッディーンは自らの姿を踵に描かせた長靴をフラグに獻上し、私の頭をハンの足裏で踏んで下さいと語つてフラグに對する屈辱的な臣従の姿勢を示したという。この結果フラグは彼の罪を許し、慰撫した後イブン・ビービーによればモンケ・ハンの聖旨と牌子を授けたという。一方ルクヌッディーンは到着後曾ての恩寵を更新され、兄弟はフラグのオルドで「和解の抱擁」を行なつた。フラグはトゥグライーとパルワーネの説明に基づいて兄弟間で國土を二分する事を承認した。そして兄弟にシリア・エジプト遠征の準備の爲タブリーズへ行く様に命じた。兩 سلطانはタブリーズでシリア遠征の準備をしたが、

出費が多く、資金が少い爲王の財庫 (khizāna-yi 'amira) から四百 balish の借財 (istiqraḍ) をした。(A. A. p. 632) この後兄弟はフラグに従ってアレッポへ向かったという。<sup>⑧</sup> ラシードの記述に従えばフラグは一二五九年九月十二日シリア遠征に出發して先ずクルディスタンに進軍し、續いてディヤール・バクルの各地を征服した後ユーフラテス河を渡ってアレッポを包圍一二五九年十一月にこの町を攻略した。ダマスクスは自發的に開城した爲フラグはこの地 shahna を置き、モンゴリアより大カン・モンケ死去の知らせが届くとシリアを去って一二六〇年六月六日にアフラート Akhlāt に歸着したとされる。<sup>⑨</sup> イブン・ビービーはフラグがアゼルバイジャンに歸つて後、

スルタン・イッズッディーンに聖旨と牌子を返すよう求め、これをスルタン・ルクヌッディーンに與えて彼を大いに慰撫した後歸國の許しを與えた。(A. A. p. 633)

と記している。ラシードとイブン・ビービーの記す所を併せて考えるとイッズ・ルクン兄弟は約二年間ルームを離れてモンゴル軍のシリア遠征に従った事になる。この間の事情は詳細が不明で、ラシードは兩スルタンがフラグのシリア遠征に従軍した事については記さず、アクサライー、パール・ヘブラエウス、マクリーゾーは兩スルタンのフラグの許への伺候を一二五九年の事としている。<sup>⑩</sup> 結論は容易に下せぬが、筆者はモンゴル側、ルーム側各々の最も基本的な史料であるラシードとイブン・ビービーの記述を尊重したい。いずれにせよルーム・サルタナトにとつて重大な意義を有した事柄はイッズ・ルクン兄弟間の國土の二分がフラグによつて承認された事である。三度に亙るモンゴル側の出頭命令に應じなかったスルタン・イッズッディーンが初めてフラグの許へ赴いた理由はラシードが記す様にバグダートのカリフすら滅亡させたモンゴル人に對して最早抵抗出来ぬ事を悟った爲であらう。この故にイッズッディーンはフラグに對して屈辱的な臣従の姿勢を示し、バイジュと戦いモンゴル人に反抗した「罪」が許される事を願つたのである。兩スルタンがフラグの許へ伺候し、ルームの現状を承認された事はルーム・サルタナトの君主が名目上完全にモンゴル人の支配下に入った事を象徵する事件であつた。一二四三年のバイジュの侵攻に始まり、一二五六年のフラグのイラン到着とこれに連動したバイジュ

の第二次ルーム侵攻を経て一二五八年ルームの兩スルタン、イッズ・ルクン兄弟が揃ってフラグに臣従するに到り、モンゴル人によるルーム征服は漸くその完成へと近づいていた。

イブン・ビービーによればイッズ・ルクン兄弟はフラグのアゼルバイジャン歸還の後歸國を許され、イッズッディーンはコニヤへ、ルクヌッディーンはトカトへ歸還した。フラグの承認によつてルーム・サルタナトには國土の西半を支配するイッズッディーン、東半を支配するルクヌッディーンという二人のスルタンが並存する狀況が確定したが、行政の最高責任者である宰相（サーヒブ）はシャムスッディーン・トゥグライー一人であり、彼が兩スルタンのワズィール位を兼ね持っていた。しかし一二六〇年中にトゥグライーが他界するとイッズッディーンはワズィール位を *ro'ib* の ファフルッディーン・アリーに與えたのに對し、

イル・ハン（＝フラグ）はスルタン・ルクヌッディーン のワズィール位にムイーヌッディーン・バルワーネー彼はその命令に全ての者が従う所のハーキム (*hakim-i nāṭiq al-amr*) であつた——を就けるよう命ずる聖旨を送つた。(A. A. p. 633)

という。ルクヌッディーンの側では宰相の任命すらイル・ハンの命令で行なわれたのである。先に述べた様に兩スルタンはフラグの財庫から借財 (*qard*) をしていたが、フラグはこの借財の取立てと毎年の貢納の徴收の爲 *Taj al-Din Mu'azz* と *Tuklak bakhshi* という人物を派遣した。アクサラーイーによれば二人は先ずスルタン・イッズッディーンの許を訪れ、「現金税」*mal* を要求した。スルタンはこれに對し、

スルタン・ルクヌッディーンは汝らの來た道筋に居たのであるから先ずそちら側の *mal* を獲得せねばならぬ。(M. A. p. 65)

として使臣達の要求に應じなかつた。使臣達がフラグの御前へ戻り、ルームの狀況を上奏するとフラグは次の如き聖旨を發したという。



スルタン・イッズッディーンよ、次の事を知れ。汝がこの地へ来た時我々は汝の期待した如何なる恩寵もかなえてやり、如何なる要望にも答えてやった。又汝が自ら必要とする資金を借りたいと願った時、我々は財庫から（それを）出してやった。ルームの諸地方の爲には約束による少額の財物で我々は満足した。ところが自らの悦樂と安寧の場所へ着くや汝は我々の恩恵を忘却し、我々の使臣達に對し無禮をなし、ルームの税と借財については全く（我々の）財庫へ運ぼうとしなかった。今や汝が魚の如く海の底へ潛り、鳥の如く空中を飛ぼうが、此後我々（の追求）から救われ、安全になる事はあり得ない。（*M. A. p. 68*）

一方イブン・ビービーによれば密告によりスルタン・イッズッディーンが海上を通じてエジプトのマムルーク朝と接觸している事を知ったルクヌッディーン側の宰相ムイーヌッディーン・パルワーンはモンゴルの部將アリジャクを通じて直ちにこれをフラグに知らせたという。エジプト側の史料であるマクリーズィーにはルームのスルタン・イッズッディーンがエジプトのスルタン・バイバルスに使者を派遣して支援を乞うた事が記されている、イッズッディーンの意圖は恐らく一二六〇年 *'Ayn Jalūt* でモンゴル軍を撃破したマムルーク朝エジプトの支援を得てモンゴル人に最後の抵抗を試みんとしたものであろう。フラグは此の様なイッズッディーンの動きを知ると處罰の爲アリジャクを長とするモンゴル軍をコニヤへ向かわせた。イッズッディーンはモンゴル軍が「サルタナトの最後の息の根を止める事 (*idītal-i-hushasha-yi salīnat*) を決め、接近中」との知らせを受けると一族、家臣を伴ってアンタリヤへ逃亡した。外壁の破壊により最早國都コニヤの防衛すら不可能であった。二日後モンゴル軍とルクヌッディーンがコニヤへ到り、一二六一年八月十二日ルクヌッディーンはルームの唯一のスルタンとして即位した。イッズッディーンは尙アンタリヤに留まっていたが、自らの部將 *'Alī Bahādūr* がコニヤ近郊の *kārwānsarā-yi Altūnbiḥ* でモンゴル軍に敗れた事を知ると *Fasiliyūs* (バシレウス = ビザンツ皇帝) の許へ使者を送り、ガレー船でイスタンブル *Istanbul* の *Balūghūs* (= バライオログス) の許へ亡命した。イッズッディーンのビザンツへの亡命はモンゴル人によるルーム全域の征服を可能にした。即ち表面上フラグに臣従しながら

も尙エジプトのマムルーク朝と接觸し、貢納を支拂わず、最後までモンゴル人に對して反抗的姿勢を示したスルタン・イッズッディーンがルームを去った事によりルーム・サルタナトにはモンゴル人に従おうとせぬ公式の敵は最早存在しなくなった。ルームの唯一のスルタンとなったルクヌッディーンは曾て一度もモンゴル人に對し反抗の姿勢を示した事なく、とりわけフラグ・ハンには全面的に服従し、その直接的な支援の下にスルタン位に即いた人物であった。モンゴル人はこのスルタン・ルクヌッディーンを通してルームの全域を支配する事が出来る様になったのである。この意味でイッズッディーンはルームからの逃亡とビザンツへの亡命はモンゴル人によるルーム征服の完成であったと考えられる。そしてイッズッディーンの亡命は西暦十一世紀以來小アジアを支配して來たセルジューク朝スルタン政權の獨立した主權がその「最後の息の根」を止められた事を意味するものではなからうか。

最後にイッズ・ルクン兄弟のその後について述べておきたい。先ずルクヌッディーンは一二六六年までスルタンとして君臨した後彼の擁立に功あつたバルワーネの奸計により殺害された。<sup>⑤</sup>ルクヌッディーンの死には異教徒であるモンゴル人が關つていた爲ルクヌッディーンはイブン・ビービーにより「殉教スルタン」*sulṭān-i-shahid*と呼ばれている。一方のイッズッディーンは「異郷にて亡くなったスルタン」*sulṭān-i-marhūm-i-gharib*と呼ばれる。イッズッディーンはビザンツへの亡命後バシレウス、ミカエル八世バライオロゴス（在位一二六一—一二八二）に對してクー・デタを企てたが、發覺して一城塞に監禁されたという。<sup>⑥</sup>アクサライーによればイッズッディーンは叔母がキプチャク草原のベルケ・ハンの妃となつていた爲彼女がスルタンの救出をベルケに勧めた。その結果、イブン・ビービーによると嚴冬期に結水したドナウ河（*āb-i-Dunāb*）を渡つたベルケの軍隊はビザンツ領深く侵入してイッズッディーンを救出し、ベルケの御前へ連れていった。ベルケは彼を大いに慰撫した後「*Sulṭān*」と「*Satq*」をイクターとして彼に授けた」という。<sup>⑦</sup>以來イッズッディーンはルームに歸る事なく、異國にある事十八年の後一二七九年クリミアで他界した。イッズッディーンがビザンツ、キプチャク草原を轉々とする過程でバルカン半島に残した遺民はキリスト教徒となりながらも尙トルコ語方言（*Gagauz* 語）

を話す人々として現在に到っているという。<sup>⑧</sup> スルタン・イッズッディーン・カイカーウスはガガウズとしてその名を今日に留めているのである。

## む す び

本稿ではイッズ・ルクン兄弟のスルタン位争いを中心に一二四三年に始まるモンゴル侵入後のルームの政治史を考察して来た。その結果以下の事が明らかになった。

- 1、一二四三年のキョセ・ダグの戦いを中心としたバイジュのルーム侵攻は短期的な遠征の枠を越えるものではなかった。
- 2、一二四五年のスルタン・ギヤースッディーンの没後ルームの國政はバトゥ側のハーキム・シャムスッディーンにより掌握されていた。
- 3、一二四九年のサーヒブ・シャムスッディーンの死後、イッズ・ルクン兄弟のスルタン位争いが開始されたが、その発端はモンゴルの大カン・グユクによる裁定であった。
- 4、一二四九年と一二五四年の二回イッズ・ルクン兄弟はスルタン位をめぐる戦いを交えたが、いずれもイッズッディーン側の勝利に終り、スルタン位争いで優勢であったイッズッディーンはモンゴル人に對し、獨立の姿勢を保った。
- 5、一二五六年のバイジュの第二次ルーム侵攻により、イッズッディーンの優位は覆され、兄弟による國土二分の事態に到った。

6、一二六一年フラグの直接的な支援の下にルクヌッディーンがスルタンとして即位し、イッズッディーンはビザンツへ亡命した。イッズッディーンの亡命によりモンゴル人のルーム征服は完成した。

イッズ・ルクン兄弟のスルタン位争いはそれ自體ルームの國內的問題であったが、この争いは同時にモンゴル帝國內部

の動向に深く關する問題であり、モンゴル人はこのスルタン位争いを通じてルームを征服し得たと考えられる。我々は今後この様にして成立したモンゴル人のルーム支配が如何に進行したかを追求する必要がある。

## 註

- ① C. M. d'Ohsson, *Histoire des Mongols depuis Tch'ingiz-Khan jusqu'à Timour Bey ou Tamerlan*, tome III, La Haye et Amsterdam, 1834, pp. 80—84, 92—99.  
 ドーンン (佐口透譯)「モンゴル帝國史四」東京 一九七三、八五—八八、九八一—〇五頁。
- ② Claude Cahen, *Pre-Ottoman Turkey*, London & New York, 1968.  
 Osman Turan, *Selçukîlar Zamanında Türkiye*, İstanbul, 1971.  
 この他ルームに關する研究については拙稿「西曆十三世紀の小アジア」(東洋史研究三八—四)を参照。
- ③ この戦うに到る情況は J. Matuz, "Der Niedergang der anatolischen Seldschuken: die Entscheidungsschlacht am Kösedag," *Central Asiatic Journal*, 17, (1973) に詳し。
- ④ スィウマスはモンゴル軍に對して自發的に降服した爲住民の殺戮を免れたが、カイセリはモンゴル軍に抵抗した爲住民と準備隊は征服後モンゴル軍の略奪と虐殺を受けた。(A. A. pp. 527—530)
- ⑤ ドーンンは一二四二年「チョルマングンはすでに死んでいた」(*Histoire des Mongols*, t. III p. 79, 佐口譯 第四卷八四頁)
- ⑥ A. A. p. 533)  
 事や記している。(A. A. p. 533)
- ⑦ アルメニアの史家キラコスはバイジュを「ベチャ・フルチ」Bayu хурчи と呼んでいる。(Киракос Гандзакци, *История Армении*, (перв.) Л. А. Ханларян, Москва, 1976, стр. 175) イブン・ウー・ウーの箇所 (p. 514) は Bayu qurchi の呼稱を用いている。チョルマングンがチンギス・ハンのフルチ (箭筒士) であつた事はよく知られており (J. T. / P. X. 4, p. 150, 「モンゴル秘史・三」村上正二譯 東京 一九七六、二二八、二二八、三二八頁) タマチ軍の指揮者はチョルマングン・バイジュ共フルチ出身者であつた事が分る。
- ⑧ イラン總督アルタンについては本田實信「阿母河等處行尙書省考」(北方文化研究 二一九六七)を参照。
- ⑨ L. T. / P. X. 4, p. 561.
- ⑩ ハレトの學者 İ. H. Uzunçarşılı は *nāib* の任務は「君主が不在の時國事を代行する事」であつたという。Osmanlı Devleti Teşkilatına Medhal (Z. Baskı), Ankara, 1970, p. 93.
- ⑪ ベレタの異名が Sayin Khan (「良あへん」) であつた事は

- へ知られしる。F. W. Cleaves, "The Mongolian names and terms in the History of the Nation of the Archers by Grigor of Akanc", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 12—3, 4, 1949, p. 425 参照。
- ② 一般に「シサル海」はカスピ海をよすが、イブン・ビービーでは黒海の事を言う。
- ③ SAT(Y?)QSWN A. A. p. 543.
- ④ フルメニアの史家キラコス、スムバトによればルームのキリキア遠征は一二四四年と一二四五年の二度行なわれた様で、*Chronique du royaume de la petite Arménie (par le comteable Sémrad)* "Recueil des historiens des croisades, Documents arménien, t. 1 pp. 649—651.
- ⑤ タガウォルはキリキア・フルメニア王の稱號であった。北川誠一「モンゴル帝國の北西イラン支配とオルベリヤン家の極限」(北大文學部紀要二六—二七)一〇三頁参照。
- ⑥ M. A. p. 36, A. A. p. 591.
- ⑦ rind (なりや者) の複數形。イブン・ユーヌスとは他に ikh-wān, fityān の語が見られる。既述の時期ロニヤとはフー達なぞ、fityān (青年同胞團) が存在した様である。
- ⑧ A. A. pp. 574—583.
- ⑨ T. J. I p. 205, J. T/K p. 568, *Chronography* p. 411.
- ⑩ T. J. I pp. 212—213.
- ⑪ *Chronography* p. 412.
- ⑫ A. A. p. 564.
- ⑬ グヌク・ハンの命令で西方へ到り、アフガニスタンの Badghis に駐留していたジャライル部出身の將軍。
- ⑭ イブン・ユーヌスはサーヒブ殺害の日附を記していない。この日附は *Anonyme* p. 51 にある。
- ⑮ キラコスはキリキア王ハトウムと共にグヌクの許から歸還したルクヌッディーンがバイジュ・ノヤンの許で同行の爲軍隊を用いる事を許された事を記している。 *История Армении*, ctp. 196.
- ⑯ 偉丈夫たる事、男らしき。
- ⑰ キリシヤ系の *ghulām* であったが、スルタンの信頼が厚く、一二一五年から一二五四年までルーム・サルタナトに仕えた人物で各地にフトラサ(學校)・宿驛 *ribāt* 等多くの建築物を残した。A. A. pp. 593—4, *Anonyme* p. 52, *Chronography* p. 413.
- ⑱ フクラヤイ西方約四〇里にある宿驛。K. Erdmann, *Das anatolische Karavansaray des 13. Jahrhunderts*, teil 1 text, Berlin, 1961, pp. 83—90 に詳しく調査記録がある。
- ⑲ *Anonyme*, p. 51.
- ⑳ A. A. pp. 591—593.
- ㉑ *Anonyme*, p. 51, *Chronography* pp. 413—414.
- ㉒ *Histoire des Mongols*, t. III pp. 94—95. 佐口謙「第四卷」一〇〇頁。
- ㉓ 三人のふたりの名はそれぞれ *Kalākāy*, *Qutlu Malik* と讀ぶが、他の一人の名の讀み方は不明。A. A. p. 596.
- ㉔ *mustawfi* は財務長官、*amir-i 'arid* は軍隊の經理機關首の

- 事<sup>ハ</sup>ウズンガシル、Osmanlı Devleti Tefkilatına Med-hal, pp. 95, 97.
- ② A. A. pp. 596—601.
- ③ A. A. p. 595.
- ④ ibid.
- ⑤ A. A. pp. 616—618. Fakhr al-Din 'Alī は前出のカーデー・ノッフルッディーンとは別人。この人物は後にルームの宰相(サレム)となり、長く權勢を保った。
- ⑥ A. A. pp. 604—616, M. A. pp. 38—40, *Chronography* p. 422.
- ⑦ *The Journey of William of Rubruck to the eastern parts of the world*, (trs.) W. W. Rockhill, Hakluyt Society, London, 1900, pp. 280—281. カルゴラ・ルブルタ(護雅夫譯)「中央アジア・蒙古旅行記」東京、一九五〇、三二〇頁。
- ⑧ A. A. pp. 604—608, 630—631.
- ⑨ S. Vryonis, Jr. によればイッスッディーンの母親はギリシヤ人司祭の娘であったという。 *The decline of medieval Hellenism in Asia Minor and the process of Islamization from the 11th. through 15th. century*, Univ. of California Press, 1971, p. 466. イブン・ジョージはイッスッディーンの母親が Burdūl (現在の Burdur) の「深窓育ちの娘」であったと述べている。 A. A. p. 472.
- ⑩ 位置不詳、恐らくはクルシヤ・カイセリ間の地點と思われる。
- ⑪ A. A. p. 610.
- ⑫ A. A. p. 609.
- ⑬ ghulam は奴隸の意であるが、ここではギリシヤ人キリスト教徒乃至改宗者の事であろう。
- ⑭ アクサラーイーによればイッスッディーンは特に Kondi-riabī なるギリシヤ人を重用し、この爲にイスラーム教徒のマニール達はこの人物を怨嗟的としたという。 M. A. pp. 49—50.
- ⑮ G. Le Strange によれば後の Ulu-Burlu であると云う。 *The lands of the Eastern Caliphate*, London, 1905, p. 151.
- ⑯ イブン・ジョージによればバガチエリ達とは「ベトシマ Mar-'ash の森や野を故郷とし、この地からルーム・シリヤ・パルメニアへ出撃し、街道を分断し、隊商を殺害し、宿驛の襲撃を行なつて」たトルコ人の事であると云う。 A. A. p. 618. バガチエリ(イブン・Faruk Sümer, Ağaç Eriler, *Türk Tarihi Kurumu Bülteni*, XXVI—103 (1962), pp. 521—528, 参照。
- ⑰ ラシードによればチホルマクンの率ゐたタマチ軍の萬戸長の一人は Qürulas (<Horulas) 源田氏の Yakā Yisūr という者が在り、この息子 Khwāja nūyān がその後を繼いだという。 J. T./P. X. A. p. 153. イブン・ジョージに現れるホーシヤ・ノヤンは恐らくこの人物の事であろう。 イブン・ジョージ・アクサラーイーによればホーシヤ・ノヤンは一二五六—一二五七年の冬にルームの nā'ib Nizām al-Din Khurshid の手により毒殺されたという。 A. A. p. 626, M. A. pp. 43—44.

- ⑫ A. A. pp. 618—625, M. A. pp. 41—42, *Anonyme* p. 53, *Chronography* p. 424.
- ⑬ T. J. III pp. 93—94, J. T./Q p. 136, J. T./A p. 22.
- ⑭ J. T./Q p. 215, J. T./A p. 36.
- ⑮ ロニヤに因縁なく見とある現在に Ilgin.
- ⑯ ロニヤに因縁なく見とある現在の Adak 及び Awak である Bisatay の名は誤りである。J. T./P-X-A pp. 152, 562. この名を記すのはイン・ユーユーの誤りである。A. A. p. 625.
- ⑰ 前世紀コンスタンティノープルはフランク人の手中にあり、ニケーアにラスカリス朝の亡命政権があった。Lashkari はラスカリスの音寫である。
- ⑱ ラシードによればバイシヤは一二五七年—四月にマヌーン近郊でモラタに拜謁し、大に叱責された。J. T./Q pp. 220—224, J. T./A p. 39.
- ⑲ M. A. p. 49 前世紀のサナンシ (ニケーア) 皇帝はテオドルー二世ラスカリスであった。
- ⑳ ヌナカ南東の Yildiz Dagı.
- ㉑ Alişaq 及び 'Alişaq はロニー、船族連の町である 'Alināq の事である。J. T./P-X-A, p. 285, 'Alināq の父 Taktir birkchī はフランクに殺された。'Alināq は富貴を通じたことである。ibid. Qadaghān はチンギス汗麾下のタテチ軍の部將である。F. W. Cleaves, *The Mongolian names and terms*, p. 421. 参照。
- ① A. A. p. 632.
- ② J. T./Q pp. 328—340, J. T./A pp. 68—70.
- ③ M. A. pp. 60—62, *Chronography* pp. 434—435, *Sulūk* p. 421.
- ④ *Sulūk* pp. 469—470.
- ⑤ A. A. p. 637, M. A. p. 70, *Anonyme* p. 4.
- ⑥ A. A. p. 649, M. A. pp. 86—87, *Anonyme* p. 56, *Sulūk* pp. 571—572. 著者不明のヤンシヤーン朝史によれば死した日附は A. D. 一二六六・三・三十一。
- ⑦ A. A. pp. 638—639, M. A. p. 75, *Sulūk* p. 522.
- ⑧ M. A. pp. 75—76.
- ⑨ B. Spuler はこれを一二六四年の夏と秋ノガイの率いる一軍が、セラキフに侵入し、彼地をモルトン・イッスチャデーンを殺すことである。Die goldene Horde, die Mongolen in Rußland 1223—1502, (2. Aufl.) Wiesbaden, 1965, S. 48.
- ⑩ A. A. p. 639. Sulkhad はセントリム Qrim 市の舊名 Sūraq はクリミアの狭海スタクの事である。イマズマデーレンがヤンキ軍に救出されて後クリミアに住んだ事はラシードの誤りである。J. T./K p. 662.
- ⑪ Paul Wittek "Yazıñoğlu 'Ali on the Christian Turks of the Dobruja" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* XIV (1952) Univ. of London, 参照。

the tenant.”

Studies on this area have tended to stress this aspect—the way in which the magistrates protected the landlords’ interests, while neglecting to discuss their responses to the tenants’ demands. In fact, however, the tenants made demands on the magistrate for controls on the levels of rent set by landlords. It is clear that in cases where magistrates responded to these demands, whether passively or formally, the tenants would often use this as a pretext for resisting the landlords.

The prevailing view of the role of the magistrates—as the public authority, “accepting the people as his sons, and abhorring evil as his enemy”, meant that they could not put the tenants’ problems aside.

This article examines some of the functions of these magistrates, especially in the area of tax and rent collection, in a preliminary attempt to confirm the above points.

## THE RŪM SALṬANAT AFTER THE MONGOL INVASION

ITANI Kōzō

After the invasion of Rūm by Bāyḡū Nūyan in A.D. 1243 (the battle of Kōse Dagħ) the Rūm Salṭanat surrendered (*tl*) to the Mongols, but did not come under their direct control. According to the accounts of Ibn Bībī, Aqsarāyī, the anonymous Ta’rīkh-i Āl-i Saljūq and Bar Hebraeus which are the most important sources regarding the Rūm Salṭanat, the following facts are clear. From 1243 to 1249 a man called *ṣāḥib* Shams al-Dīn Iṣfahānī, who had become *ḥākim* under the auspices of Ṣāyīn *khan* (Bātū) in the Qifchāqsteppe, reigned in Rūm with despotic power. After the *ṣāḥib* was executed by order of the Great Khan Guyūk in 1249, the supporters of *sulṭān* ‘Izz al-Dīn Kay-kāwus II, who had twice rejected challenges for the *sulṭān*-ship by the latter’s younger brother Rukn al-Dīn Qīlīch Arslan IV, took the administration of the Salṭanat into their own hands and strived to secure the independence of the national administration.

However, in 1256 Bāyḡū again invaded Rūm, in conjunction with the



Western Expedition of Hūlāgū *khān*. With the defeat of the army of the Salṭanat, 'Izz al-Dīn fled to Lascarids of Nicaea, and Rukn al-Dīn became *sulṭān* of Rūm.

The following year, 'Izz al-Dīn returned to the capital (*Dār al-Mulk*) Qūniya, and shortly after the territory of the Rūm Salṭanat was divided in two, with the agreement of Hūlāgū *khān*. But in 1261 'Izz al-Dīn again had to flee, this time to Michael VIII Palaeologus of Istanbūl, in the face of the advancing Qūniya-army of Rukn al-Dīn, who received full support from the Mongolian army.

From the above it seems to me that the subjugation of the Rūm Salṭanat by the Mongols was completed with the fleeing of *sulṭān* 'Izz al-Dīn from Rūm in 1261.